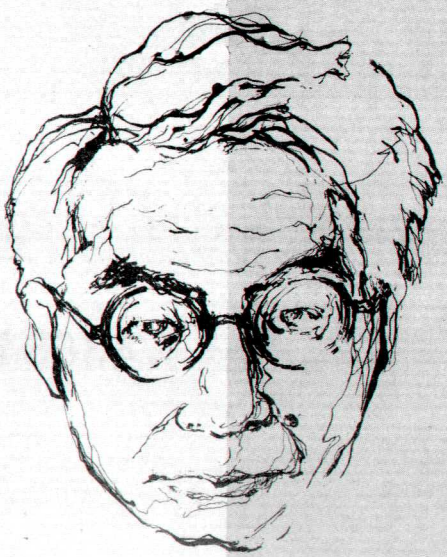
小説 坂口安吾

杉森久英

小説 坂口安吾

杉森久英

河出書房新社



小説 坂口安吾——©1978 定価はカバー・帯にあります

昭和五十三年九月二十日 初版印刷
昭和五十三年九月三十日 初版発行

著者 杉森久英
装幀者 巌谷純介
発行者 佐藤晧三
発行所 株式会社 河出書房新社・東京都新宿区住吉町九五
電話 営業三五五-五三一一・編集三五五-五三二一
振替東京〇-一〇八〇二
印刷所 暁印刷株式会社
製本所 小高製本工業株式会社

目次

世に出るまで……5
退屈男……29
羽族の生態……70
焼け跡の巨人……90
嵐の人……118
狂える人の妻……151
温泉の町で……173
税金闘争……190
反撃……218
競輪事件……243
桐生の日々……259
最後の日……274
あとがき……277

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

小説 坂口安吾

世に出るまで

坂口安吾は、戦前ほとんど無名であった。

彼が世間に知られるようになったのは、戦後である。

文壇では、少数の人だけが彼の才能を認めていた。

彼自身も、自分の書くものがそれほどつまらないものでないと知っていた。

しかし、少数者の闇の評判が、世間へ広まってゆくには、年月がかかる。彼はなかなか有名にならなかった。

文学に志して、いつまでも認められないくらい、さびしく、みじめなものはない。人は誰も自分を知らず、足早に自分の前を通り過ぎてゆく……こういう屈辱を、たいていの文士は、世に出るまでにいやというほど味わっているはずである。

誰にも認められなくても、自分で自分の才能を自覚していればいい、などというのは、負け惜しみである。人はやはり、人に認められ、尊敬されたり、おだてられたりしなければ、実力が出せないものである。

戦争中、坂口安吾は「現代文学」の同人に参加した。この雑誌は平野謙、荒正人、檀一雄、大井広介らがやっていたもので、みな春先の筍のように、すこしずつ文壇へ顔を出しかけてはいたが、まだ一人前とまでゆかず、俳優でいえば、大部屋で監督から声のかかるのを待っているような段階であっ

た。

彼等はみな、暇なものだから、おたがいにたずねあって、文学論を戦わせたり、雑談にふけったりして、時をすごした。

皆が一番多く集まったのは、千駄ケ谷の大井広介の家である。

大井広介は本名を麻生賀一郎といって、九州福岡の生まれである。名前と出身地から想像されるとおり、麻生鉱業の麻生太賀吉はその一族に当り、吉田茂首相の娘で、吉田が外遊の時ホステスとして連れて歩くので有名だった麻生和子は太賀吉の妻である。

大井広介の家は、そのころから千駄ケ谷の駅にちかい、外苑の塀に接したあたりにあり、いまは近所一帯、クラゲの絵をひっくり返しに描いたような、温泉の記号のついたホテルが立ちならんでいるが、もとは閑静な高級住宅地である。

この家へは、いろんな文学者が集まった。井上友一郎、宮内寒弥も常連である。坂口安吾もそのひとりであった。

安吾は一度来ると、自分の家のような顔をして寝泊りし、月のうち十日に及んだ。平気で書庫へ出入りし、「三国志」や探偵小説など、勝手にひっぱり出して来て、寝そべって読みふける。

一時間ばかり読むうちに、眠くなると、二時間眠り、また一時間読んで、二時間眠った。本を読むのに倦きて眠るのか、眠るのに倦きて本を読むのかわからないという按配である。

大井家における坂口は、まるで家具か庭石のように、自然で、邪魔にならぬ存在であった。

彼はいつのまにかいなくなり、いつのまにか来ている。

「さっき、玄関に何か音がしたようよ。坂口さんがいらしたのでないかしら」

大井夫人が家じゅう探すと、坂口は二階の一間でひっくりかえっているという風であった。

この家では、坂口安吾がいつ何どきやって来て、幾晩泊ろうが、突然いなくなろうが、まったく気にしないで、ほったらかしておいた。

どこの家でも、他人に知られたくないその家の秘密というものがあるものである。大井広介の家は「現代文学」の同人たちが、入り替り立ち替りたずねて来て、集会所のようになっていたから、大井は家族に指示をくだして

「知らない客の前では、家庭のことを一切口にするな。平野謙、その他誰それ、誰それの前では、金銭の話以外なら、さしつかえない。ただし、坂口安吾の前では、どんなバカバカしい話をしてもかまわない」

といった。

坂口安吾がなくなってから、彼の文学碑が故郷の新潟の海岸につくられた。日本海をへだてて、はるかに佐渡を望む砂丘の中腹に、巨大な岩をひとつ据えてあるきりで、ほかに何の小細工もない。いかめしいところも、気取ったところもない、自然のままの石で、人はその前で寝ころんでいようが、立ち小便をしようが、どんな醜態を演じようが、すこしも気にする必要がないといった感じの、ふしぎな安定感を持ったのびのびした碑である。それはちょうど、坂口の前なら、どんなバカバカしいことを話してもかまわないといった、大井広介の言葉を、そのまま形にあらわしているかのようである。

どこの家でも、家庭内のいざこざは絶えないものである。大井家では、広介と母親の折合いが悪くて、ときどき母親が大井を怒らせ、がまんできなくなった大井が暴力を振うと、母親が悲鳴をあげ、大騒ぎになることがあった。

そんなとき、井上友一郎や平野謙が居合わせると、母親は彼等の同情をひこうとして、いっそう大きな悲鳴をあげる。

井上や平野が、そういう女性心理にうんざりしながらも、口先だけでも大井をたしなめようとしたり、仲裁に入ろうとして、何か言葉をはさむのが常であった。

ところが、坂口安吾はそういうとき、まったく知らぬ顔で、大井を引留めるでもなければ、母親をかばおうともしない。しまいに母親は、坂口の前では悲鳴をあげても、効果があらわれないから、お芝居をしなくなった。

それでは坂口は、この親子喧嘩にまったく注意を払わなかったかといえば、決してそうではなく、のちに大井広介の人物論を書くとき、このことに触れ、案外こまかに神経をはたらかせていたことを示して、大井を驚かせた。

坂口安吾はあちこちの居酒屋を呑みあるいているうちに、一軒の女が好きになった。せまい店で、女のほかにはコックが一人しかいない。コックの前で隠し立てするにもおよぶまいと、大ぴらにくどいていたら、コックは実はその店の主人で、女とは夫婦だった。

女は立ち場が苦しくなって、家を飛び出すと、安吾のところへころがりこんだ。

安吾は女をつれて、木賃宿のようなところを渡りあるいているうちに、どこかで毛ジラミをひろって来た。毛ジラミというやつは、人体のあまり公開できない部分の毛根に食いこんで、なかなか駆除できない虫である。この虫はやがて、彼の臍の中まで侵入した。

坂口から大井広介にあてて、なんとか退治する方法を知らないかと、悲痛をきわめた手紙が来た。

この手紙は、彼の直面する苦悩と惑乱の深さをまざまざと示して、もしかしたら彼は自殺をさえ考えているのではないかと思わせるほどであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大井はふと、いつか「現代文学」の同人仲間の宮内寒弥が
「毛ジラミの妙薬を知っているよ」
と自慢していたことを思い出して、宮内に相談したらどうかと、返事を出した。
数日後に、これも仲間の平野謙があそびに来たので、大井広介は、
「坂口さんから、毛ジラミの退治法を教わりたいといって来たんだがねえ……」
言下に平野は
「ああ、それは宮内君に聞けといってやるといい」
「実は、僕もそういって返事を出したんだ」
大笑いになった。
大井広介は、いろんな人から来た手紙や葉書を、個人別に分類して、ハトロンの袋に保存していた。
空襲がはげしくなり、大井家のまわりもあぶなくなったとき、大井は書斎の前に大きな穴を掘って、大事なものを全部埋めることにした。
四月の大空襲のとき、大井は書斎に集めておいたあらゆる物を、せっせと埋めたが、穴が大きすぎたため、あとで掘り出すのに、一日半かかった。
その作業の最中に、坂口安吾が、そのころ住んでいた蒲田から、見舞いに来た。
「皆さん、無事だったかい」
「ええ、お蔭さまで」
「ずいぶんたくさん、掘り出したんだねえ」
「穴が大きすぎたもんですから、なんでもかんでも、ほうり込んじゃって……」

安吾は珍しそうに、そこいらに散らかっているものを眺めていたが、ふと「坂口安吾」と上に大きく書いてある袋に目をとめて
「あれは何だね？」
「あなたからもらった手紙や葉書類です」
安吾は一ヵ月に十日も大井家に泊っているくせに、何かあると、手紙や葉書をよこした。
「こんなにたくさん書いたかねえ。あんなものを保存して、どうしようというのだ？」
「いまに、あなたが死んだら、『坂口安吾書翰集』を出すつもりです」
「ウワッ……そんなものを出されて、たまるか」
「いつかの、毛ジラミの退治法に関する質問の手紙もありますよ」
「飛んでもない話だ。そんなものを出すことは絶対に許さん」
「そのときは、あなたは死んでいます。冥土から文句を言うわけにいかんでしょう」
「著作権の侵害になる」
「手紙をもらったのは僕だから、所有権は僕にあります」
「遺言で、手紙類の発行を禁じておく」
安吾はカンカンに怒って帰ったが、その次の空襲で、大井家は丸焼けになった。
書斎の貴重品は、この前掘り出すのに一日半かかって、こりごりしていたので、埋めるのを面倒がっているうちに、全部焼いてしまった。
坂口安吾はまた蒲田から見舞いに来たが
「手紙類はどうしたかね」
「みんな焼いてしまいました」

安吾はうれしさが包み切れない笑顔になった。

「現代文学」の同人たちは、顔を合わせると、よくトランプ遊びや、そのほかのゲームで、時間つぶしをやった。

トランプはウスノロというあそびである。キングならキング、クイーンならクイーンと、同じ印のものを四枚ずつ、人数だけそろえて、バラバラに配り、めいめい持った中から、一枚ずつ、次へ渡す。

真中に人数よりひとつ少い数の玉をおいてある。ワン、ツー、スリーで、一枚ずつ次へ渡し、同じ印が四枚そろうと、真中の玉を取る。玉は人数より少いから、誰か一人、ボンヤリしていて取りそこなう者が出る。それがウスノロである。

探偵小説の犯人を当てっこする遊びもやった。おしまいの解決の部分を切り取った本を、一冊ずつ持ち、期日までに読んで、答案を書くのである。

同人の中では、坂口安吾と平野謙が年長なので、答案を審査して、採点する役である。

答案の書き方は、人によってちがっていて、大井広介などは、ごく簡単に、誰が犯人で、その理由はこれこれと、ほんの数行ですませるが、坂口安吾は原稿用紙を三枚も四枚も使って、くわしく理由を書く。

あるとき、大井の出した答案は、ピタリと犯人を当てているのに、五十点しかついていない。

一方、長畑一正という男の答案は、まるで見当ちがいの人物を犯人と指定しているのに、六十点ついている。

大井が憤慨して

「こんなバカなことがあるか。僕は犯人を当てているのだぞ。それだのに、五十点しかつけないとは、どういうわけだ」
坂口と平野は
「君の答案は、あまりにも簡略で、答案の名に値しない」
「長畑君の答えはまるでちがっているのに、僕より点数がいいのは、どういうわけだ」
二人は顔を見合わせたが、平野謙は返事に困る風なのに、坂口安吾はシャアシャアと
「長畑君の答案は、文章に苦心した跡があり、自然描写もすぐれているからね」
「自然描写とは、なんだ」
「たとえば、このとき血がさっとほとばしったとか、インク瓶ががたりと倒れたとか、まわりの様子が手に取るように描いてある」
「じょうだんじゃない。いくらうまく書けていたって、犯人がちがっていたら、答えにならんじゃないか」
大井がいくら抗議しても、坂口は頑として取り上げようとしなかった。
(以上は大井広介の談による。坂口、平野には別の言い分があるかも知れない)
イエス・ノウという遊びもよくやった。これはテレビの「私の秘密」と同じで、相手の考えている人物について、いろんな質問を発し、相手はイエスかノウかを答えるうちに、正解が出るという仕組みである。
こういうとき、坂口安吾の頭のひらめきは天才的で、たった一回か二回の問答で、ずばりと答えを出すことがあった。
坂口はこういう遊びが大好きで、いつのまにか勧進元のようになり、しょっちゅう大井広介をせっ

ついて、同人に召集状を出させた。
探偵小説の犯人当てゲームでは、平野謙が坂口安吾の度肝をぬいたことがある。
あるとき出題された作品に対する平野の答案が、ピタリと犯人を当てたばかりでなく、その理由がいちいちもっともなのである。
坂口は
「ウーム……平野君、君は天才だ」
と絶讃した。
「エヘヘヘヘ、そうでもありませんよ」
平野はにやにや笑っていたが、それにはわけがあった。
昭和十二、三年ころ、まだ無名の平野謙は、毎日九段の大橋図書館へかよって、明治大正文学の文献をあさっていた。この図書館は明治時代の大出版社博文館が建てたもので、博文館で発行した探偵小説がたくさんおさめられていたが、平野は文献あさりに疲れると、探偵小説を借り出して、読み散らしていた。
このとき出題された探偵小説は、そのころ平野がすでに読んでいたものだった。このゲームでは、そんなことがないように、なるべく新刊の本をえらんで、おしまいを切り取っておくなど、注意していたのだが、この小説は、新刊は新刊でも、前に一度訳されたものだったのである。
坂口安吾はそんなことと知らず、会う人ごとに平野謙を天才だとほめそやすので、はじめのうちは何食わぬ顔をしていた平野も、だんだん良心の呵責を感じて来て
「実は、あの小説は前に読んだことがあったのでね」
と白状した。

「なあんだ。そうだったのか」
以来、坂口の平野に対する信用はガタ落ちになった。
坂口安吾はある日、大井広介と雑談中、酒癖の悪い男の話になった。
「酒癖が悪いといえば、古谷綱武も悪いねえ。いつだったか、さんざん酔っぱらって、平野謙に文学論をふっかけたら、あべこべにやっつけられて、ポロポロ涙をこぼしたそうだ」
そのころ文学志望の青年の間では、酔うとトコトンまで議論をし、どちらか泣き出すか、つかみ合いの喧嘩になるまでやめないという風があった。これは文学というものを命がけの修業と心得ていたからで、むかしの武士が真剣勝負をやって腕をみがいたように、おたがいに相手を罵倒し、ののしり合ううちに、友情をたしかめ合うのであった。
小林秀雄などはその方の名人で、彼の周囲に集まる文学青年で、彼に泣かされなかった者はないというし、泣かされた者は、それを光栄として喜ぶという風であった。おそらく日本独特の文士気質であろう。
さて、坂口安吾は古谷綱武の酒癖のうわさをしてから、二ヵ月ばかり後に、大井広介に言った。
「このあいだ古谷が酒に酔って、平野謙と文学論をやったそうだ。古谷の議論があまり愚劣で、平野の言うことがまったく理解できないので、しまいに平野は情なくなって、涙をポロポロこぼしていたそうだ」
大井広介は
「坂口さん、あなたのこのあいだの話では、たしか古谷君が平野君に泣かされたということでしたが……」
坂口はカッとなって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com